

第3回山口県地震・津波防災対策検討委員会の議事概要

日時：11月7日（水）10:00～12:15

場所：県庁4階 共用第5会議室

出席者：三浦会長、兵動委員、金折委員、羽田野委員、栗山委員

- 議題
- 1 津波浸水予測モデルについて
(日本海で想定する津波、南海トラフの巨大地震による津波)
 - 2 L1津波の考え方について
 - 3 地震動・地盤被害予測手法について
 - 4 人的・物的被害想定について
 - 5 津波等の防災対策について

■議事概要

議題1 「(1)津波浸水予測について 日本海で想定する津波について」(資料1)

対象とする4つの想定断層の津波断層パラメータ設定値及び、津波浸水シミュレーションを実施する上での条件設定等について、この内容で実施することを承認
(主な意見)

- 最大の津波高だけを示すのではなく、各地点で先に押し波が来るのか、引き波が来るのか示せないか。2004年のインド洋大津波で、先に引き波が起これり、魚を捕りに行って津波に襲われた事例がある。
- 津波の特性や各地点での津波に関する情報は、講演会など住民が集まるところで積極的に広報活動すべきである。

議題2 「(1)津波浸水予測について 南海トラフの巨大地震による津波について」(資料2)

国が南海トラフ巨大地震で検討した11ケースのうち、本県が対象とする3ケース及び、津波浸水シミュレーションを実施する上での条件設定等について、この内容で実施することを承認

議題3 「(2)L1津波の考え方について」(資料3)

この対象断層モデルの設定、シミュレーション条件で実施することを承認

議題4 「(3)地震動・地盤被害予測手法について」(資料4)

この手法で実施することを承認
(主な意見)

- 南海トラフの巨大地震では、液状化強度の求め方において揺れの継続時間の影響を加味するため、補正係数 C_w を1から0.8に低減しているが、東日本大震災の検証から0.8は妥当と考える。
- 液状化対象層(10m)が液状化した場合の体積ひずみ5%であると、沈下量は50cm程度になるのは妥当と考える。

- 被害想定は震度 6 弱以上の揺れでは堤防が機能するとし、津波の浸水想定では 6 弱以上は機能せず浸水とするのはダブルスタンダードになっている。その辺はきちんと整理しないと県民に説明が難しいと思う。
- どの程度の震度で液状化により堤防が機能しないと判断するのか、基準がまだない。
- 前回までの評価で、軟弱地盤地帯でも、ボーリングデータから明らかに粘土のところも液状化の対象に入っていたのが気になった。地域によりまちまちなので、山口県の状態を見て、過大評価とならないように判断した方が良いと思う。
- 急傾斜の評価に降雨は考慮されていないが、地震後、地盤が緩んだ際に降雨の影響を考えないといけないと思う。説明の際には、降雨の影響を考慮していないと示す必要がある。これについてはまだ研究段階であり、今後の課題である。
- 今回の地震で、液状化と同様に甚大な被害を生じたものとして、丘陵地において山を切り、谷を埋めて平地に変えた地域での被害がある。対策を図るには切土、盛土図を作成する必要がある、山口県でもそれらが被害想定に反映できるよう、データ整備等を行っていくことが今後の課題である。

議題 5 「(4)人的・物的被害想定について」(資料 5)

想定する風速について、案の風速毎秒 8m を山口県の地域事情に合う毎秒 15m に変更することとし、それ以外の手法等はこの内容で実施することを承認

(主な意見)

- 国は風速を平均風速と比較的強い風の 2 種類を設定しているが、山口県での年平均風速は、日本海側は毎秒 3m、瀬戸内側は毎秒 2m~1.8m 程度である。県の年平均風速は毎秒 3m 程度と考えて問題ない。
- 比較的強い風を毎秒 8m としているが、気象台で発表する火災気象通報について、発表基準の 1 つに湿度を考慮しない、風速だけの基準は毎秒 15m である。毎秒 15m は高い気がするが、毎秒 8m とする根拠が分からない。
- 山口県の強風注意報の発表基準は毎秒 10m であるが、予報用語では強い風を、風速 15m を超える風としており、一般的な印象としても、強い風とは毎秒 15m ぐらいが適当と思われる。

議題 6 「(5)津波等の防災対策について」(資料 6)

(主な意見)

- 防災意識の向上について、向上させた意識を継続させることの重要性を強調した基本方針を示し、記載してもらいたい。